

科学技術に対する仏教の視点

山本修一

はじめに

二十世紀は科学技術の世紀でした。なかでも戦後の後半世紀は、科学技術の急速な発展が見られた時代です。現在、まさに日進月歩の発展をしている情報技術、生命科学、宇宙科学といった各分野は、二十世紀初頭や半ばにはとても考えられなかったことを可能にしています。それはかつてSFや漫画に描かれていたことを、現実に行っていると云ってもよいでしょう。少し考えてみればわかるように、科学技術の進歩にはさまざま

じいものがあります。二十世紀の初めにライト兄弟が空を初めて飛んでから、わずか五、六十年で宇宙を飛ぶようになったわけです。そして、今では、第二の地球を、ということ、火星改造計画まで進んでいます。このままの調子で科学技術が発展していくとすれば、将来、例えば五十年後の二十一世紀の半ばにはどのような生活が描かれるのでしょうか。実はこれを予測することは、極めて難しいのです。なぜならば、これまでの五十年間でさえ、五十年前に今日の科学技術の歩みを予測できた人はいないからです。それほど科学技術

の進歩の仕方は速いのです。

しかし、その一方で、考えなければならない課題も多く出てきております。その一つは、私たち人間は、このように急速に進歩する生活形態に十分対応できているのだろうか、という課題です。近年の青少年などに見られる種々の事件は、異常という言葉で表現されていますが、もしかすると急速な科学技術の進歩に原因があるかもしれません。私は相当関連があるのではないかと思っています。そこで、ここでは科学技術が目指してきた道、その特徴と、人間の自然性と言いますか、生身の人間が求めているもの、これを仏教の立場から対比させて考えてみたいと思います。そして、望ましい科学技術のあり方を模索できればと思います。

一 生物と人間の違いと問題の始まり

さて、初めに人間の問題を捉える上で比較の対象として、生物のことを少し考えてみたいと思います。ライオンでも、牛でもよいのですが、彼らは何百年も、何千年も、また恐らく何万年も、形も、またその生活

も変わっていないように思えます。もちろん、何百万年といった生物の進化は別にしてです。その意味で考えますと、生物というものは、本来極めて保守的なものの、変化を嫌うものだと言つてよいと思います。ある意味で、生物らしさとは、変わらないこととも言えるわけです。それは彼らが、生活を変える手段をもたないからです。

それに対して、人間はどうか。確かに人間も昔はほとんど変わらなかったと言つてよいでしょう。私は戦後の生まれですが、私と四十歳ぐらい上の世代の方達と話をしているだけでも、あまり違和感はありません。子供の頃の遊びにしても、家庭生活の様子にしても、かつての生活には、あまり大きな変化を感じません。私が小さい頃、家では、ご飯やお風呂は薪で炊き、もちろん洗濯機も、掃除機も、冷蔵庫もありませんでした。テレビも、電話もありません。音が出るものは、ラジオと鉄の針で音を出す蓄音機だけです。多分、ラジオや蓄音機を別にすれば、明治時代の初めの頃も同じような状況だったと想像できます。したがって、私たち

の生活も、かつては五十年や百年といった単位では、ほとんど変化がなかったわけです。

ところが、一九七〇年代、私が学生になった頃になると、日本のほとんどの人々の生活が科学技術の恩恵を受けるようになってきます。学生さえも、テレビや電話をもち始めるようになるからです。それはかつて、テレビと言えば、一般のサラリーマンが一ヶ月の給料で買えなかった時代から、学生もテレビを買うほど、値段が下がってきたからです。そして、電卓やパソコンが普及し始めるのも、一九七〇年代です。もちろん、現在のパソコンに比べると、玩具みたいなものですが。私は、一九七〇年ごろが科学技術の産物が一般に大きく普及し、変化が大きくなってきた時代の始まりと考えています。携帯電話など近年開発されたものを別をすれば、ほとんどの家電製品は、一九七〇年代には、出そろっていると言つてよいと思います。

こうして、人間の生活は、かつては極めてゆっくりと変化していたものが、近年ではその変化が極めて速くなっていると言つてよいと思います。もちろん、そ

の変化の速度は、千年前はずっと遅く、一万年前はさらに遅いものであったと考えられます。こうして、人間もかつては動物と同じように、その形体も生活もほとんど変わらなかった時代から、生活が急速に変化する時代へと移行してきているわけです。これは、何が変ったのかと言えば、裸の人間ではありません。生身の人間はほとんど変わらないのに、その環境が変わっているのです。その環境をつくり出しているのが、科学技術の産物ということになります。

さて、一九七〇年代というのは、科学技術の産物が一般化し始めた時代と位置づけられると言いましたが、別の意味でも重要な時期だと思っています。一つは、環境問題において、かつては足尾銅山、水俣病、イタイイタイ病などといった特定の企業による特定の地域の問題であったのが、海洋や河川の汚染、大気汚染、農薬や添加物による食品汚染といった、人間の生活基盤の汚染が現れてきた時代でもあります。もちろん一九八〇年代になれば、環境問題も地球規模の問題へとさらに発展してくるわけですが、その前の段階として、生

活基盤が破壊され始める時代と位置づけられます。環境が汚染され始めるとともに、もう一つの重要な問題として、心も汚染され始めたのが、一九七〇年代ではないかと思っています。それは、私も学生になりたての頃でしたからよく覚えていますが、一九七〇年代になると、異常な事件が見られるようになります。その典型的なものは、コインロッカーに赤ちゃんを置き去りにして殺すといった母親による赤ちゃん殺しです。その頃は、母性本能が破壊され始めたと言われました。このような事件が異常と言われるのは、犯罪が一般的に了解可能かどうかが基準になっているからです。了解可能な事件は異常とは言われませんが、赤ちゃんを育てるのは母性としての本能だから、それは常識で、殺すはずのない母親が赤ちゃんを殺す、それはその常識を大きく逸脱するような事件であるから、異常な事件というわけです。ところが、その頃から、そのような異常な事件が頻繁に起こるようになり、現在に見られるような、青少年による凶悪犯罪へと移行しているわけで、これらは直線的につながっているように見えます。

ます。その典型は、「誰でもよいから殺したかった」というような、青少年による無差別殺人、あるいは青少年による親殺しです。確かに、これは倫理観が壊れていると言えます。私はむしろ、倫理観が壊れているというよりも、壊れるというのは、元はあったという意味ですが、むしろ、もともと他者のことを思いやるといった倫理的な思考回路さえもない青少年が増えていくように思います。もしかすると、心、それも他人の心などは全く見えない人間が出てきているようにも思います。これが、科学技術のあり方の影響かもしれないというのが、本論で言いたいことになります。

二 科学技術の本質は何か

これまでは、百年、二百年、もっと昔であれば、千年も二千年もほとんど変化しなかった。ところが、現代は、十年前はずっと昔。コンピュータの世界は、二年も経てば、ボンコツになつてしまう世界です。各家庭には、ガス、電気、水道が整備され、風呂もガスで沸かし、ご飯も電気炊き。電話、洗濯機、テレビ、

ステレオ、自動車など、科学技術の産物で埋まっています。今では、FAXやコンピュータも各家庭に入り、インターネットでつながれ、各人は携帯電話をもって外出する。インターネットは別にしても、こうした現在のような生活を手にし始めたのが一九七〇年頃からだとすれば、現在のような速度の速い変化の時代は、わずかに三十年程度でしかないということです。

さて、では一体何が変わってきているのか。それは人間を取り巻く環境であって、それらは科学技術の産物です。しかし技術の産物は、いわゆる道具、手段であって、人間そのものではない。この道具や手段が変わることによって、我々の生活形態が変わってきているのです。そして手段が変わることによって、さまざまなものとの関わり方に変化が訪れようとしているわけです。また、人間がこれまでの歴史的な経過の中でもってきたものの、例えば、先に述べた母性の様なものを自然性と言うならば、人間の自然性さえも変わり、脅かされているのかもしれないわけです。

ここで、最近特に発展が目覚ましいコンピュータと

通信技術の歴史を簡単に振り返りながら、科学技術の本質とは何かという問題を考えてみたいと思います。

(一) コンピュータと通信技術の世界における変化

世界ではじめてコンピュータと呼ばれるものがつくられたのは一九四六年で、アメリカのペンシルバニア大学でのエアニクというものです。これはもともと弾道計算を行うためにつくられたものでした。二万本もの真空管を使い、重さは何と三十トンもあった、とてもなく巨大なものです。その計算能力は、一秒間に五千回程度しかありませんでした。もちろんそれでも、人間が行う計算に比べれば、はるかに速いことから、コンピュータの有用性が見出されるわけです。それが、わずか五十年後の今日では、通常のパーソナルコンピュータでも数百万回、数千万回毎秒、ましてやスーパーコンピュータでは一兆回毎秒の計算能力をもつものに進化してきたわけです。そして現在、パソコンでさえ、十億回毎秒の領域へ、スーパーコンピュータでは千兆回毎秒の速度を誇るようなものになろうとしてい

ます。こうなってくると、当然のことながら、ある部分では人間の能力をはるかに凌ぐものになります。ある部分ではというのは、記憶や検索などの領域では、とても人間は太刀打ちできない。ただし、人間の脳の優れたところは柔軟性です。記憶の確かさではかないが、パターン認識やものの同定などの領域では人間の方が優れています。このようなことから、人間の記憶の仕方や認識の仕方は、コンピュータのそれらと、どうも違うものらしいことが近年では言われております。

現在人間が処理しなければならない情報量は、一日一メガバイト（メガは百万）、そして生きるうえで必要な概念は十万以上だそうです。情報処理の方は、人間は一日一メガバイトが限界だそうです。一日一メガバイトは、単純計算で、一日十二時間として、日本語換算で十二語毎秒です。確かに一秒間に十二語というのが、限度だというのはわかります。しかしコンピュータでは、人間の一日の情報処理量を一秒もかからず処理してしまう。これでは圧倒的に、コンピュータが勝ちです。

加しているそうです。このように私たちが関わる情報量は急増したわけです。

では、このコンピュータと通信手段の変化は、一休人間にとって何をもたらしたのでしょうか。一つは、速度の変化です。つまり速くことをすすみます。そしてもう一つは、通信媒体が、かつては人間を通して行われてきたものが、ほとんど人間の手を借りないで通信ができるようになってきたことです。これらのことによって、情報の質が変化し、そして人間の間に於ける関係性を変えてしまったと言えます。対話や学校教育が情報伝達の中心であった時代には、そこで伝えられたのは、生活の知恵、社会道徳、知識など、文化の中にストックされていた情報でした。ここでは情報を受ける側は、速度の遅い分だけ、得られた知識を自分のなかで整理したり、体系化したりすることができたわけです。ところが、データ通信時代になって、情報はストックとしての意味合いが薄れてしまい、多くの人が無意識に感じているように、情報はどんどん流すものへと変化してしまったわけです。その意味で

す。こうしてコンピュータは、どんどん速くなり、人間の能力をはるかに凌ぐ存在になってきています。

一方、通信手段も大きく変化してきています。通信白書によれば、日本でラジオ放送が始まったのは一九二五年、テレビ放送が一九五三年、カラーテレビ放送が一九六〇年、CATV放送が一九六三年です。一般に普及するまでのタイムラグを入れると、一九三〇年代までは、通信媒体は、人間同士の対話と新聞、書籍、郵便物、そして学校教育が担っていました。そして、一九三〇年代から五〇年代はラジオが主役です。一九五〇年代以降になると、当然テレビが主役になります。これが高度経済成長の原動力でもありました。現在では、光ファイバーなどのデータ通信が主流になっています。また、現在、消費者が一年間に受け取った情報の総量——「消費情報量」と言いますが——は、一九九八年度で三・五掛けの十の十六乗ワード（新聞紙に換算すると約十兆ページ）で、これは過去十年間で二・三倍、一九六〇年代に比べて約十倍の増加率だそうです。また、発進情報量も過去十年間で約三・五倍に増

言えば、これから進められようとしているIT革命とは、情報は温めて、考える材料にする時代から、流す時代への移行と言うこともできるわけです。

（二）技術の本質

では、もう少し科学技術を広く見て、科学技術とは何か、そして科学技術の本質は何かということについて考えてみたいと思います。人間にとって技術とは何か、という問題は、難しい問題の一つであるかもしれませんが、ここではその特徴として、四つあげておきたいと思います。

まず第一に、技術の産物は、目に見えるものであること。つまり物質でできている。もちろんソフトのようなものもありますが、結局ソフトも何らかの物的なものを動かすためのものであることを考えますと、技術の産物は、ものであると言ってよいでしょう。

二つめは、人間が楽をするためのものであること、別の言い方をすれば、人間から労働を省くと言ってよいものです。

三つ目に、できるだけ速くことを行うためのもの、これも別の言い方をすれば、時間を短縮するとも表現されるものです。

そして最後に、技術の産物は、人間が思うように動かせられるものです。もちろん、技術の産物は、もともとそれぞれの目的をもつてつくられたものですから、その目的以外には使うことはできません。これは言うまでもないことですが、技術の産物は、そのもっている目的に添って、思うように人間が操作するためのものです。

それでは、少しそれぞれの特徴を、具体的に考えてみましょう。

①技術は目に見えるものをつくり出す。これは最もわかりやすいことです。自動車、テレビ、コンピュータ、いずれの技術の産物も目に見えるものです。ものであるからこそ、わかりやすく、しかも力を発揮することができ。しかもこの特徴は、大変強く人間に働きかけてきます。逆に言うと、我々は、目の前に置かれると大変弱いとも言えるでしょう。それだけ、もの

としてあるというのは、大きな魅力をもっているのです。

②人間から労働を省く。これは如何に楽に物事を行うかということです。トラクターは田畑を耕すためにつくられたもので、人間が行っていた労働をはるかに減らしました。階段を上がるという労働を減らしたのが、エレベーターやエスカレーターです。何千回も繰り返し行うような計算を瞬時に、しかも正確に行ってしまうコンピュータも頭脳労働を軽減しました。これも大変魅力的なものです。そして楽に物事を運ぶことができるようになった。これも誰にでも当てはまるわけです。誰にでもある、重労働はいやだ、楽に仕事をしたい、という願望を、技術は実現してきたわけです。

③できるだけ速くことをこなす。つまり、時間を短縮する。これは二番目の特徴である労働を軽減する意味も、大抵は合わせもっていますが、時間的な部分だけをとり上げたものです。歩いて行けば、何カ月もかかる距離を、電車や飛行機で行けば、数時間で行ってしまう。確かに、物事を速くやってしまうことは決し

て悪いことではない。遅いより速いほうがよいに決ま

っているように思えます。速く一つのことを終えれば、別のことをする時間ができて、生き方に余裕も出てくることを期待するわけです。速くことをこなすというのは、本来余暇を生み出すためのものだったと思われるのですが、しかし現実的には、そうはいかなくて、次から次に仕事は増えてしまっています。

④思うように動かせる。人間のようなものは、思うように動かせない。ところが、相手が機械であれば、人間の命令する通りに動きます。ハンドルを右にきれば、車は右に曲がる。洗濯をしようとすれば、スイッチを入れるだけで、洗濯を始めてくれるわけです。今日は疲れたから、右に行きたくない、あるいは、洗濯はしたくない、と機械は言わないわけです。これは、動物や人間のように生きている存在は、自らの意志をもつて主体的に生きているために、他者の言いなりにならない。しかし機械は自らの意志をもたず、つくられたプログラムに従って動く存在であるということなのです。また、人間の側でやりたいときにできて、やめた

いときにやめることができるのも特徴です。

以上のような特徴をもったものが、科学技術の産物であると考えます。そして、科学技術は、もともと人間にあった、楽に、速く、そして思うままに、といった欲望を実現してきたものとも言えるわけです。欲望を実現するのが、科学技術の役割である、確かにその通りだと思えますし、また技術が成し遂げてきたことは倫理的にも善であるものもたくさんあります。しかし、ここで少し考える必要があるのは、では、一体科学技術が目指している究極の人間の生活は何かということ。要するに、人間はほとんど何もしなくて済むような生活ができるようにすることなのでしょうか。もし、そうなったとしたら、人間はきつと近い将来滅びてしまうことになるでしょう。ですから、きつとそうは言わないでしょう。

三 仏教の人間観

次に、仏教、あるいは広く東洋の思想では、人間あるいは人生をどのように捉えているかを考えてみたい

と思います。仏教の視点は、科学技術の恩恵などは全く考えておりませんので、これは人間の自然性に基づいたものを表すものと言えましょう。ここでは先の科学技術の特徴と対比させて、四つの特徴を考えてみたいと思います。

(一) 目に見えないものが大切

仏教では、目に見えないものこそ大切であると主張します。特に仏教においてというほどのことではないかもしれませんが、人間が生きるうえで大切なもの、心、命、信頼、恩といったものはすべて目に見えないものです。人間の体の部分と心では、どちらを大切に考えているかと言うと、身なりは変わり果てても、変わらない友情をめでたりするのは、肉体よりも心の方を重視していることを示しています。どちらが本質的かと言えば、心であると言えるでしょう。

(二) 人生は楽をしてはいけない

よく、苦勞は買つてでもしろ、と言われます。仏教では、「煩惱即菩提」、「生死即涅槃」と言われますが、結局、悩みや苦しみがあるからこそ、悟りがあり、幸

せがある。老いることや病気、死があるからこそ、限りある人生を少しでも、よく生きようとするわけです。その意味で、特に若いころの苦勞は、人生にとって財産であるわけです。

(三) 人間が育つには時間がかかる

人間の体が育つのは、少なくとも十数年から二十年かかります。身体においてもそうですが、むしろ心が育つには、もっと長い時間が必要です。例えば、論語には、「十有五にして学を志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順」とあります。現在は人間の寿命が延びているので、必ずしもこれをそのまま当てはめようとは思いませんが、少なくともこれらは、人間の心が育つのは、例えば、独り立ちできるには三十年、不動の自己の確立には四十年、この程度の時間がかかることを示しています。仏教では修業を重んじます、修業をなぜやるかと言えば、悟りを開くためには、ありのままではだめで、苦しい修業の末に初めて達成できるものであるからです。もちろん在家の人間には、修業というこ

とをあまり強調するわけではありませんが、基本的な考え方は同様で、「人生は修業である」と言ってもよいでしょう。したがって、身体だけでなく、心が育つには十分な時間が必要で、じっくりと成熟するのを待つて初めて、成し遂げられるものであることを示しています。

(四) 人間は思う通りに動かない

先に述べましたように、人間は、これはどんな存在であつても、自分が思うように動くものではありません。例え赤ちゃんであつても、子供も、親も、また他人も、いずれも主体的に生きる存在は、自分の思うように動くものではありません。長い間飼ひならしてきただ犬でさえ、なかなか思うように動いてはくれません。一見思うように動いているように見えるのは錯覚で、犬には犬の目的、例えば、この動作をすれば御主人はきつとおいしい食べ物をくれるだろう、といった目的があつて、人に従っているように見えるだけです。要するに、生きているものは、他者に左右されないこと、すなわち主体性をもっていることがその特徴の一つで

あるわけです。

また、人生は思うように行かないものです。思う通りに生きたい、そのために、私たちはさまざまな苦しみや悩みを解決しようとするわけです。「よからは不思議、悪しからは一定とおもえ」と日蓮も言っておりますが、人生というものは、思う通りに行くことがまれであることを示しています。

さて、こうして見ていきますと、科学技術が目指しているものと、仏教が目指しているものとは全く反対のものであることが、よくわかります。

四 科学技術は何を変ええるか

仏教が求める人間のように、心のように目に見えないものを大切にし、人生は楽をするのではなく、苦勞をしつかり積んで、ゆつくりと思いが熟していくのを待つ。そして、思う通りに動かないのが人間であり、人生である、と捉えていくのが多くの人が抱えている人生観ではないかと思えます。ところが、そこに科学技術の思想が入り込んでくることによって、大切なこ

とが失われているとするならば、これは大きな問題です。それを見ていきたいと思います。

例えば、子供を育てることを考えてみます。子供を育てるのは、親の義務であり、責任であり、そして子供は、それに対する恩を感じる必要があると考えます。ですから仏教でも、親に対する恩を重んじますし、親を殺すことは最も重い罪の一つとなるわけです。それは、子供を育てるのには、子供に対する愛情や大変な労力が必要だからだと思います。毎日、毎日、本当にくたくたになるほどの労働が必要なわけで、それも人間の場合何年も必要なわけです。それも愛情があればこそできることです。ところが、子供を育てるために必要な労働から解放されたい、楽をしたい、どうしても人間というのは速く育たないのか、いつも思っているかどうか。次第次第にその思いが募ってくる、子供は邪魔者以外の何者でもありません。また、思う通りに育たない、思う通りに言うことを聞かない、それに対して腹を立てたり、さらには暴力に出ることも当然起こってくるでしょう。私は、そうし

た思いが現代の社会では次第に強くなっているのではないかと思っています。それが科学技術が浸透することによって引き起こされているのではないかと考えます。先程も言いましたように、科学技術のもたらすものは、面倒なことを避けて、なるべく楽に、そして速くという思いを強くします。それも心の奥底です。子供も主体性をもった人間ですが、それを思う通りに動かしたいと思うのも現代では当たりまえになつてきているのではないでしょう。

その一方で、子供から見た場合にはどうなるでしょうか。親の愛情は、目に見えないものです。その愛情が感じられなければ、親というものは、自分の欲望を満たすうえでは邪魔者になります。もちろん生活などの物理的な部分で常に世話になっていますし、親がいなくなれば経済的にも困るのは目に見えているのですが、十分な精神的成長がなければ理解できません。もちろんこれは短絡的過ぎるかもしれませんが、親にとっても子供にとっても、愛情や恩を感じなければ、どちらにとっても邪魔者です。これが科学技術による影

響であるかもしれません。このような考え方は、これまでではなかったでしょうから、了解できないことが起きてしまうことになるのではないのでしょうか。

また、今家庭で、親が子供に教えなければならぬ生活上のことは、ほとんど無くなりつつあります。ご飯を炊くにも、洗濯するのも、風呂を沸かすのも、いずれもボタン一つで済みます。もちろんその前段階はあるわけですが、大抵のことは、ボタン一つで終わるわけです。機械の中身がどうなっているのかは、全く関係ありません。薪でご飯を炊いたり、風呂を沸かしていた時代であれば、薪への火の付け方、空気の入れ方など、生活の中で親から教わるべきことが多くあったわけです。そこで得た知識、むしろそれは知恵と言えるようなものだと思いますが、ところが今では、ご飯はコンビニエンスストアやファーストフードの店に行けば、いつでも食べられる。レンジで温めれば、簡単なおいしいものが食べられるわけです。

こうして今、親として子供に伝えるものは、もちろん全く無くなったわけではありませんが、次第に減っ

てきていることは確かです。経済的なことを別にすれば、子供の方でも、生きる手段は簡単に身に付けることができるわけです。学校でも、教育を単に知識の伝達というふうに考えてしまえば、人間の知識よりもコンピュータに蓄えられている知識の方が圧倒的に多く、正確で、また探すのも簡単です。いやな先生に聞く必要もありません。そうすると、学校における教師の役割も次第に減ってきます。先に見たように、伝達手段が人間と人間の間における会話であったものが、次第に人間を介さずに済んでしまうようになってきます。

ここで述べたことは、ほんの一部のことに過ぎません。実際にはもっと多くのことがらについて述べる必要があるかもしれませんが、かつての人間関係のつくり方を知っている人であれば、少し考えてみれば多くの場面で同様のことを感じることができると思います。

こうして人間の間における関係性が減っていくことによって、信頼が失われ、人間のように自分の思う通りに動かないものよりも、機械のように好きなときに、好きなだけ利用できるもの、しかも文句も言わず黙々

とやってくれるような存在の方が扱いやすいことは、容易に理解できます。

こうして、家庭でも、学校でも、教育というものが、人間を介さないものになりつつあるのではないでしようか。つまり、親の愛情や生き方、学校の先生の愛情や信頼といった目に見えないものは、価値を失っていると思います。

まとめ

以上のようなことから、私は現在の科学技術の進展によって、次第次第に科学技術の考え方が私たちの心の中に浸透してきて、これまでの人間の生き方や人間関係のあり方を変えてきているように思います。

最後に重要なことを述べておきたいと思います。一つは、科学技術はあくまで手段・道具であるということです。ところが、その道具が目的になってしまっている。そして私たちは、その道具を求めて右往左往しているということです。そして、これまでは生きる上での知恵と呼ばれてきたものが、単に知識になってき

ている。しかも簡単に得られる知識になっているわけです。

さらに、現在人間が行っていることは、壮大な人体実験、あるいは社会実験であるということです。実験というものは、繰り返し行うことができるのが特徴ですが、この実験は一回だけのものです。しかもたかだか三十年という極めて短期間に行われているものです。ここでも重要なことは、まだ、世代交代さえもなされていないということです。私たちの世代は、科学技術が進歩してきた時代を知っているわけです。しかし今の子供たちは、その歴史に乗っているだけで、昔の不便な時代を全く知りません。こうした人たちがこれから社会や時代をつくっていくわけですが、これは全く未知の実験です。しかも、この実験は人間社会の崩壊への坂道を転がり始める実験であるかもしれないわけです。後戻りができない実験であるかもしれません。

これからの科学技術に必要なことは、可能なことと、実際にやることを区別することです。現在では、可能なことは何でもやるという考え方だと思います。そこ

でもう少し、人間のことを考えることが必要だと思います。それが仏教における人間の自然性といったものです。その人間の自然性に基づいた科学技術のあり方もあると思います。人間の心や人間関係を育てる、あるいは鍛える科学技術や社会のあり方を模索することです。それが科学技術のビジョンになるわけです。ビジョンをつくるためには、人間のこともっとよく知る必要があります。現在は人間のことがよくわからないで、ただやみくもに走っているだけです。これは極めて危険な実験と言えるでしょう。そこに、これからの社会における仏教の大きな役割の一つがあると考えます。

(やまもと しゅういち)

創価大学教授・東洋哲学研究所研究員

(本稿は、二〇〇〇年十一月二十二日に行われた講演内容に加筆いただいたものです。)